天王山における「里山の荒廃」と「竹林拡大」の関係性

吉田　国光
熊本大学　政策創造研究教育センター　特任助教

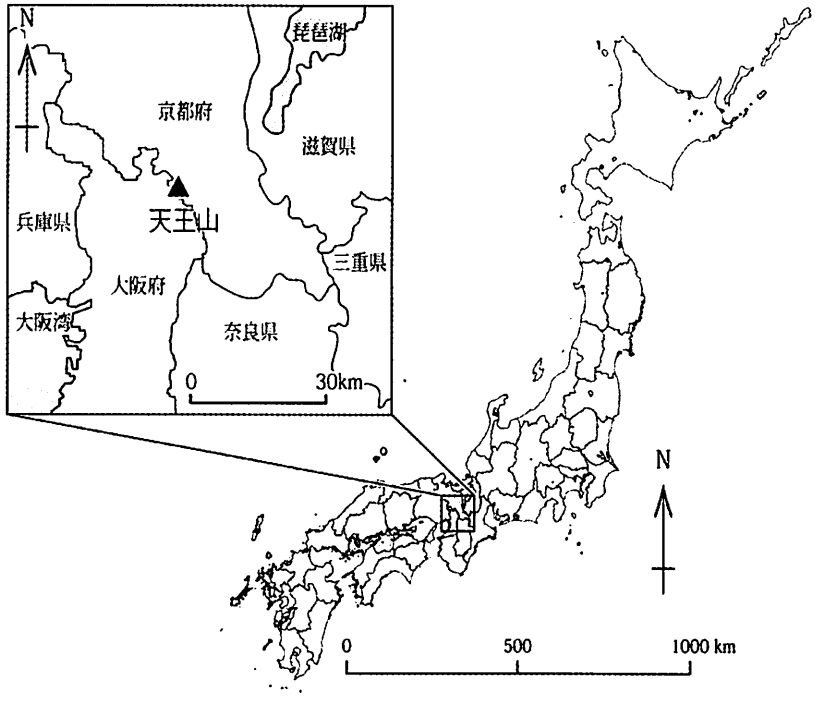
1990年代後半以降、里山保全が注目されるようになり、全国各地で森林保全活動が多様な形態で取り組まれるようになった。里山保全を推進するうえで、「里山の荒廃」と「竹林拡大」は二項対立的に位置づけられ、タケは排除すべき対象にされる傾向にある。しかし、「竹林拡大」が「里山の荒廃」に直接的に結びつけるためには不確定な要素も多く残されている。本稿では、日本有数のタケノコ産地であった天王山周辺地域を取り上げ、タケノコ生産が減退するなかで、竹林の分布状況や竹林の放棄に対する当該地域の保全活動を検討することから、当該地域において「里山の荒廃」と「竹林拡大」がどのような関係性にあるのかを明らかにした。その結果、天王山においては「天王山の荒廃」が問題意識となって、竹林ボランティアなどによって竹林整備はなされたが、「荒廃」の要因が「竹林拡大」に収斂されることはなく、竹林はこれまでの産業的利用のなされていた竹林の状態を保つように整備されていた。

1．はじめに

(1)　問題の所在

今日、世界中で様々な環境問題が盛んに取り上げられている。日本においては「里山」で起こる諸現象、とくに「里山の荒廃」が社会的文脈のなかで問題視されるものの一つとなっている。「里山」という用語については、研究者によって様々な定義がなされているが、一般的に「奥山」に対して「集落の近くに立地する林野」として用いられ、人間が薪炭用材や農業用肥料を目的として日常的に利用・管理してきたものであり、人為的撹乱によって成立した二次的な植生の林野を指している（四手井2004)。「里山の荒廃」が社会的に問題とされるなかで、その「荒廃」の要因が様々な観点から示されている。代表的なものとして、里山の主な管理者が農業従事者であったことから、農業者数の減少や高齢のために山を管理すること自体が困難になり、燃料革命や化学肥料の普及により里山の利用価値が減退したことが挙げられる（環境編2006、小泉2001)。経済活動に付随して里山は利用されなくなり、従来のものとは異なる文脈での里山の利用が求められるようになっている（渡邉2005)。

このような里山を取り巻く情勢のなかで、保全の必要性が学術誌や新聞紙上に記載され、とくに1990年代後半以降に増加の一途を辿っている[1]。これらの論文や記事上で、里山の保全に向けた様々な取り組みが紹介され、その担い手としてボランティアやNPOなどの団体が重要な役割を担っていることが指摘されている（重松1990、呉2000、倉本2002、池中2008)。一方で「里山の荒廃」が語られる際に、「竹林拡大」を問題視することが多い（徳永・荒木2007)。具体的には、タケは有用な資源であったことが示されるとともに、利用の放棄された竹林は里山の二次的な植生を保持していくうえで「悪影響」を与えている



図－1　研究対象地域

と指摘され、里山の保全を展開するうえで、排除すべき対象とされている。この他にも、都市 ― 農村交流に関する新聞記事で「町内の里山に自生し、活用の道がない竹を生かそう」[2]といったものもみられ、里山に生育するタケは活用する用途のないものと位置づけられている。

しかし、里山にとって竹林が一元的に「悪影響」を与えているという見方を疑問視する立場も存在する（柴田2003、鳥居2003）。鳥居（2003）によると、竹林の拡大は認められるものの、タケの生態に関しては不明な点が多く、現段階において「里山の荒廃」と「竹林拡大」との間に直接的な因果関係を求めることは難しいとされている。竹林が拡大した要因は、広葉樹二次林に対する管理の放棄やタケノコ生産の減退、竹林周辺農地の耕作放棄などが複合的に絡み合ったものである（鳥居・井鷺1997、鳥居1998、鈴木2010）。つまり、竹林の拡大も「里山の荒廃」と同様に、利用価値が減退することにより、竹林が継続的に利用されなくなったことに起因しているといえる。さらに柴田（2003）によると、日本における竹林のほとんどは人間の生活空間に密接して分布し、里山を構成する要素の一つとされている。これらのことから、「里山の荒廃」と「竹林拡大」は並置されるもではなく、「竹林拡大」は「里山の荒廃」に包含されるものであり、「里山の荒廃」という問題に対して「竹林拡大」という現象の位置付けを相対化する必要があるといえる。とくに今日の環境問題については社会的に構築されることが多い（淺野2008、香川2003）。問題が社会的に構築される過程、および問題解決に向けた保全活動などを当該地域の社会・経済的特徴と一体的に理解することが求められる（淺野1990；1997）。そこで本稿では、日本有数のタケノコ産地であった天王山周辺地域を取り上げ、タケノコ生産が減退するなかで、竹林の分布状況や、竹林の放棄に対する当該地域の取り組みを検討することから、天王山において「里山の荒廃」と「竹林拡大」がどのような関係性にあるのかを明らかにする。

⑵ 研究対象地域の概要

研究対象地域として京都府と大阪府の府境に立地する天王山を選定した（**図－1**）。天王山は、桂川と宇治川、木津川が合流し淀川となる辺りの右岸に位置し、平野部は狭小である。河川氾濫原にあたる幅の狭い場所に、ＪＲ東海道本線、阪急京都線、国道171号線などが並走し、京都、大阪間の交通の要所となっている。2003年には天王山の地下を通る名神高速道路と、京滋バイパスが連絡する大山崎JCTが利用可能となり、対象地域周辺の交通アクセスはさらに良好となった。さらに対象地域周辺は京都や大阪へ鉄道で１時間以内という交通条件から、京阪神大都市圏の通勤圏としてベッドタウン的性格も有しており、宅地造成が進んでいる。

天王山周辺の京都西山地域では古代よりタケノコが生産されている。さらに対象地域周辺で生産されるタケノコは2006年に「京たけのこ」として商標登録され、ブランド化が推進されている。一方で、生産量は高度経済成長期を通じて減少し、竹林が放棄される傾向にある。さらに天王山では、大部分が私有林で地権者は約300人に及び、京都府と大阪府の両府にまたがることから、土地所有形態も複雑となっている。これに加えて、地権者の高齢化や都市的労働への転換により、竹林やその他の林野利用や管理が十分に行われなくなってきている。このような現状への対応として、2005年３月に天王山周辺の森林保全を目的とした「天王山周辺森林整備推進協議会」（以下、協議会）が発足した。この協議会は、京都府と大阪府、京都府大山崎町、大阪府島本町、企業、有識者、環境保全団体が連携した組織である。そこで本稿では、協議会に参画する環境保全団体の一つである「大山崎竹林ボランティア」（以下、竹林ボランティア）の活動に注目することによって検討を進める。

２．天王山における竹林の現状

⑴ 竹林の分布

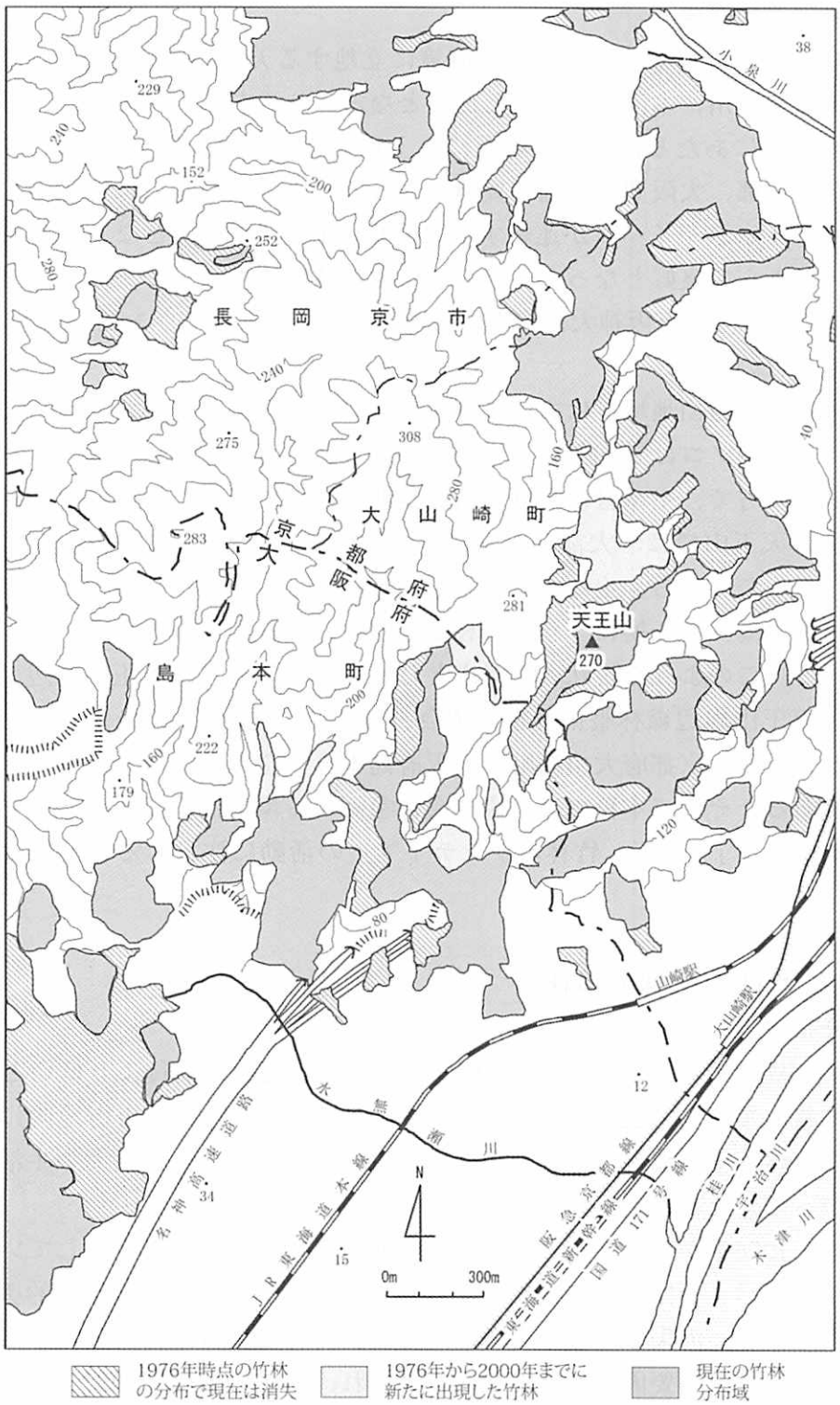
天王山および周辺地域における竹林の大部分は、標高250m前後より低いところに分布し、市街地に接している（**図－2**）。このうち北東部では、竹林が市街地内にも点在している。一方、竹林は市街地から離れた山間部には分布しておらず、人間の生活との関わりのなかで広がってきたと考えられる。

図－2より、1976年から2000年の間で竹林の面積自体はそれほど増減していない。新しく出現した竹林のパッチは６つで大規模なものではないが、いずれも比較的標高の高いところに立地している。消失したものを考慮すると、竹林面積は全体的に減少している。

竹林が減少した最大の要因には宅地化が挙げられ、鳥居・井鷺（1997）においても同様の指摘がなされている。宅地化が著しく進行した地域は、北東部の長岡京市と大山崎町の市境一帯と、南西部の名神高速道路の西側一帯である。

北東部一帯の地域では、1970年代から1980年代にかけての郊外化により宅地化が急速に進んだ。その後も洛西ニュータウンの一角として、大規模に宅地化が進められた。もともと平野部は狭小で、造成可能な地域は山の傾斜部のみであった。宅地造成は標高の高い方へと進み、1976年時点で竹林が分布していた地域で造成され、住宅が建設されていったのである。その結果として広範囲で竹林が減少した。

次に、南西部一帯の大阪府島本町でも同時期に都市の郊外化による宅地化が進展した。



図－2　天王山周辺における竹林の分布

（鳥居・井鷺（1997）、国土地理院2000年撮影空中写真、現地調査より作成）

この地域では、団地などの集合住宅建設を中心に進められた。というのも、京都と大阪の両都市へのアクセスが良いことに加え、生活用水に天王山水系の地下水が利用されるなど、良好な住環境が開発の後押しとなったためである。そのために、竹林は長岡京市でみられた形態のように減少したのではなく、広い面積が一挙に消失した。また、名神高速道路の第二天王山トンネル建設のため、計画路線上に分布していた竹林も消失した。

一方、山間部での竹林の拡大は複数の要因が重なり合うことによって起こっている。竹林が拡大する契機として、竹材業およびタケノコ生産の衰退が挙げられる。竹材業が衰退した要因としては、1970年前後に発生したマダケの一斉開花による枯死がある。一般的に、マダケは籠や扇子、茶道具などの竹細工に用いられる。さらに高度経済成長期を通じて、安価な中国産の竹材の流入やプラスチック製品に取って代わられたことが複合的に重なり合うなかで竹材業は衰退していった。その結果、マダケを中心とした竹林が放棄されていくこととなった。

タケノコ生産の衰退要因については、安価な中国産のタケノコとの競合が挙げられる。一般的に食用のタケノコに利用されるのはモウソウチクである。近年の日本において、モウソウチクは里山に侵入して他の樹種を駆逐していると認識されがちな品種でもある（柴田2003)。中国産との競合に加え、水源確保を求める大手酒造メーカーによる山林買収とタケノコ生産者の都市的労働への転換が要因として挙げられる。研究対象地域を含む乙訓郡[3]では、タケノコ作付面積が1924年（大正14）には611.5haのぼり最盛期を迎えたが、高度経済成長期の1960年には256.4haにまで減少した[4]。さらに2004年の大山崎町と長岡京市、向日市でのタケノコ作付面積は111.0haであり、天王山の位置する大山崎町ではわずか5.0haにとどまっている[5]。

かつて天王山でタケノコを生産していたA氏からの聞き取りによれば、高度経済成長期に安価な中国産のタケノコと競争できず、生産意欲の減退とともに廃業し、約2,000㎡の竹林を含めた山林を大手酒造メーカーに売却した。この他にも対象地域周辺のタケノコ生産は、従来より高値で取引されており、一部で存続しているものの、生産者の高齢化に伴い後継者のいないところは廃業に至っていることも多い。廃業した者のなかには、山林を大手酒造メーカーに売却することもあった。一方で、タケノコ生産は廃業したが、山林を売却せずに地権を保持し続けている者もおり、2005年現在、約300人の地権者が存在し、所有の形態は様々である。ほとんどの地権者は旧来から集落が存在する西国街道沿いに居住し、都市的労働へ従事している。しかし、これらの地権者は世帯収入における竹林の経済的役割の低下にともない、高齢化などにより竹林の管理を十分に実施できなくなっている。このような状況から、天王山における竹林も含めた森林保全が取り組まれるようになってきた。

⑵ 「天王山周辺森林整備推進協議会」の展開

天王山は、かつては1582年（天正10）に「山崎の戦い」の場となり、現在ではハイキングコースの整備や美術館の立地など、地権者以外の人が多く訪れるところとなっている。外部者の目に触れる機会が多いことからも、天王山の森林保全が望まれるようになった。そこで、産官学民連携による森林保全に向けた協議会が2005年３月に発足し、様々な取り組みがなされてきた（表－１）。

最初の取り組みとして、山麓にある大手酒造メーカー所有の山林11.8ha（京都府5.8ha、大阪府5.8ha）をモデル林として整備し、それを見本として天王山全体に拡大していくという目標が設定された。次に2005年に11月下旬に協議会主催で行政と大手酒造メーカー、環境保全団体の支援のもと「天王山森林ボランティア体験行事」が、大手酒造メーカー所有の竹林にて実施された。参加者は約70名で、大手酒造メーカーの社員が大部分であった

表－1 「天王山周辺森林整備推進協議会」の活動実績（2005－2009年度）

年度	月	活動内容	参加人数
2005		サントリー所有林11.8ha(京都府5.9ha;大阪府5.9ha) をモデル林に設定	
	11	森林ボランティア体験行事（竹林の整備）を実施	約70
2006	5	大山崎町で竹林整備の森林ボランティア行事を実施	105
	1	島本町で竹林整備の森林ボランティア行事を実施（119名が参加）	119
	6～12	島本町フォレストサポーター養成講座(計12回)を実施	12
	11・12	大山崎町森林ボランティア養成講座を実施	15
	7	一般府民を対象に「天王山森の学校(森林環境教育)」を実施	40
	12	地元小学生を対象に「天王山森の学校(森林環境教育)」を実施	37
	1～3	大山崎中学校の生徒を対象に竹林整備等の森林環境教育活動を実施	145
2007	4	大山崎町内の親子を対象に竹林整備等を実施	97
	5	大山崎町で竹林整備の森林ボランティア行事を実施	105
	1	島本町で竹林整備の森林ボランティア行事を実施	70
	7～12	島本町フォレストサポーター養成講座(12回)を実施	10
	7	一般府民を対象に天王山森の学校（森林環境教育）を実施	41
	12	地元小学生を対象に天王山森の学校(森林環境教育)を実施	33
	1～3	大山崎中学校の生徒を対象に竹林整備等の森林環境教育活動を実施	129
	11	西山森林整備推進協議会と合同で森林ボランティア養成講座を実施(２回)	計30
	12	西山森林整備推進協議会と合同で天王山周辺・西山シンポジウムを実施	約120
2008	6・11・3	京都府大山崎町で竹林整備ボランティア行事を実施	計185
	4・7・11	天王山で一般府民（親子）を対象に「天王山森の学校(森林環境教育)」を実施	計125
	10	地元小学生を対象に天王山で森林環境教育（ドングリの森づくり）を実施	88
	1～３	地元中学生を対象に天王山で森林環境教育（タケの伐採、竹細工等）を実施	108
	2・3	大山崎町で一般府民(親子等)を対象に森林環境教育（松山再生プロジェクト）を実施	37
	10・11	西山森林整備推進協議会と合同で森林ボランティア養成講座（初級及びリーダー養成）を実施	計55
	12	西山森林整備推進協議会と合同で天王山・西山ハイキングを実施	69
2009	6・11・3	大山崎町で竹林整備ボランティア行事を実施	計185
	4・7・11	天王山で一般府民（親子）を対象に「天王山森の学校(森林環境教育)」を実施	計125
	10	地元小学生を対象に天王山で森林環境教育（ドングリの森づくり）を実施	88
	1～3	地元中学生を対象に天王山で森林環境教育（タケの伐採、竹細工等）を実施	108
	2・3	大山崎町で一般府民(親子等)を対象に森林環境教育（松山再生プロジェクト）を実施	37
	10・11	西山森林整備推進協議会と合同で森林ボランティア養成講座（初級及びリーダー養成）を実施	計55
	12	西山森林整備推進協議会と合同で天王山・西山ハイキングを実施	69

（京都府ホームページ「天王山周辺森林整備推進協議会の取り組み」
URL；http://www.pref.kyoto.jp/kyotorinmu/1216875864232.html、最終閲覧日；2011年１月４日。より作成）

が、一般参加者も全体の約20%程度みられた。このような行事を開催することによって、それまで保全活動の未経験者に、森林保全に関わる機会を提供していた。

初年度の「天王山森林ボランティア体験行事」を皮切りに、2006年度以降は実施する取り組みも増加し、その内容も多様なものになっていった。まず、2006年度には森林保全活動に加え、「島本町フォレストサポーター養成講座」のような教育的な取り組みもなされるようになり、大山崎町でも同様の取り組みがなされた。さらに、地元の小中学生に向けた環境教育活動も行われるようになった。次に2007年度には、「西山森林整備推進協議会」との合同で「森林ボラティア養成講座」を実施し、シンポジウムを開催することによって啓発活動を展開していた。この「西山森林整備推進協議会」は2005年6月に「天王山周辺森林整備推進協議会」と同様の経緯で発足し、長岡京市西部の山林約800haをフィールドに活動している。参画する団体は、行政や企業、有識者、環境保全団体と同じような属性の主体である。この「西山森林整備推進協議会」との合同の取り組みは2008と2009年度も行われ、2008と2009年度では、啓発活動の方法がシンポジウムの開催からハイキングへと変更された。2008年度には、それまで竹林の整備が中心となっていた保全活動から、「ドングリの森づくり」や「松山再生プロジェクト」のように、より多様な樹種を対象としたものになっていった。この他に、2008年度より竹細工なども取り入れられ、保全活動によって発生した間伐材の利用がなされるようになった。

様々な取り組みがなされるようになってきたが、これらの取り組みのノウハウは対象地域で、これまで「草の根活動」的に展開してきた環境保全団体が培ってきたものである。現在、協議会による森林保全活動は順調に展開しているようにみえるが、協議会発足当初には、それぞれの立場の違いから参画主体の歩調を整えることが難しかった。次に、協議会の参画団体の一つである環境保全団体「大山崎竹林ボランティア」(以下、竹林ボランティア)を取り上げ、その活動内容について検討していく。

3.「大山崎竹林ボランティア」の展開

(1) 竹林ボランティアの構成

竹林ボランティアは1997年10月に発足した。発足当初は大山崎町役場内の組織の一つとして活動が開始された。2001年10月からは町から独立し、民間ボランティア団体となり現在に至っている。とはいえ、地元では従前からの組織を継承している団体との認識も強い。そのため、現在でも地権者からの竹林整備依頼は町役場を通じてなされることが多い。一方、地権者から竹林ボランティアに直接依頼する事例もみられるようになっている。かつて天王山を含む西山地域一帯は、前述したようにタケノコや竹材の産地であった。地権者にとって山林は経済活動の場であり、「他人」が自身の山に入ることは好ましいものではなかった。この「他人」は、保全を目的としたボランティアも例外ではなかった。このことから、地権者からの竹林整備の直接的な依頼は、竹林ボランティアの活動が、天王山周辺に居住する地権者に徐々に認知され、限定的ではあるが保全活動の主体に位置づけられつつあることを示している。

竹林ボランティアの年間スケジュールは10月より保全活動を開始し、翌年の5月までとなっている。しかし、実際の活動は6～9月も草刈りなどの美化活動も行い、年間を通じて様々な活動を展開している(**表－2**)。活動時間は、基本的には午前9時から正午まで

表－2 「大山崎竹林ボランティア」の年間スケジュール（2005年度）

年	活動日		作業場所	作業内容
2005	4月	9日	D	枯竹焼却
		16日	B	枯竹整理、タケノコ収穫
		23日	B	タケノコ収穫、総会（懇親会）
		30日	A、B、C、D、E	タケノコ収穫
	5月	7日	A、C、D	タケノコ収穫、親竹の節止め、タケの間伐
		14日	C、D	親竹の節止め、倉庫入口の扉作り、草刈
		28日	D	枯竹整理、タケの間伐、倉庫入口の扉作り、橋設置
	6月	11日	D	草刈
	7月	9日	D	草刈
		21日	D	親子交流会の準備（材料の準備など）
		23日	D	親子交流会の準備（材料の準備など）
		30日	D	青少年健全育成主催の親子交流会（竹細工、流しそうめん）
	8月	13日	D	草刈
	9月	10日	C、D、E	タケの間伐、窯作り
	10月	8日	B、E	タケの間伐、昼食持参
		22日	C、D	産業祭準備（竹プランター、一輪挿し製作）、タケの間伐
	11月	3日	大山崎町役場	産業祭（製作品の販売）
		12日	A	タケ間伐、昼食持参
		26日	B、D、E ※1	二班に分かれてタケの間伐、「天王山森林ボランティア行事」※1に参加
	12月	10日	B、C、E	タケの間伐
		17日	D	門松用青タケ準備
		24日	D	門松販売
		25日	D	門松販売
2006	1月	14日	A、C	タケの間伐、昼食持参
		28日	B	タケの間伐、昼食持参
	2月	11日	A、D	タケの間伐、昼食持参
		25日	C	タケの間伐、竹ベンチの準備、昼食持参
	3月	初旬	D	中学生卒業記念桜植樹、竹ベンチ4台設置
		11日	B	タケの間伐、昼食持参
		25日	A	タケの間伐、昼食持参

※1　酒造メーカー所有林にて整備

（現地調査により作成）

である。しかし、山頂付近での作業には登頂時間や労力がかかるために、参加者は昼食を持参して午後に渡って作業することもある（**図－3**）。上記のように、活動期間や時間は決められているが、参加者の都合により、昼食を挟む作業でも午前中に帰宅するということも可能となっている。これは参加時期にもいえることで、特定の時期のみスポット的に参加するといったことも可能であり、タケノコ掘りの時期のみ参加する者もいる。ボランティア団体の活動を安定的に展開するうえで、このような参加者はあまり好ましいものではないが、ボランティアであるため参加の強制ができないものとなっている。

活動場所	位置	面積	契約期間	立地状況
A	天王山山頂南東部	2236㎡	2003.10.1～2013.10.1	山間部であるが比較的平坦
B	天王山山頂北東部	7111㎡	2004.1.25～2007.5.31	大部分が斜面上に立地
C	JR山崎駅北	812㎡	2004.10.23～2006.5.31	周囲は住宅地で平坦
D	山崎聖天観音寺付近と線路沿い	約2500㎡	2年毎に更新，契約金30,000円	倉庫，車庫，竹炭用の窯が立地
E	ビール工場	約800㎡	2002年～，毎年更新	周囲は住宅地で平地

図－3　「大山崎竹林ボランティア」の整備する竹林（2005年）

（現地調査により作成）

竹林ボランティアの会員は2005年現在51人で、年会費1,500円である。作業日によって増減はあるが、常時参加しているのは約20～25人である。タケノコ掘りの季節を除き、1年を通じて作業に参加する会員は固定的である。参加者の年齢についてはほとんどが60歳以上であり、もしくは50歳代後半である。会員の職業は、かつて天王山でタケノコ生産者であった者やサラリーマン、建築士、写真家などといったように様々である。会員の約半数は大山崎町に居住者し、この他の会員も隣接する長岡京市やその隣の向日市など西山地に居住する者がほとんどである。一方で、兵庫県西宮市や伊丹市、大阪府堺市、京都市など遠方からの参加者も例外的にみられ、会員の居住地は広範囲に及んでいる。

会員の約半数を占める大山崎町居住者がボランティアに参加する動機として、天王山の様相の変化が挙げられる。この変化に対する危惧は、竹林ボランティアのホームページでは「この30年で竹藪の景観は大きく変わりました。…竹林を少しずつでもいい、「整備していこう」と、…活動を始めました。」[6]と記載されている。また、天王山のタケノコ生産者であったA氏は、「大山崎に生まれ育ち、自宅の窓から天王山が見えるけれども、年を追うごとにタケの植生域が約5mずつ拡がっているように見える。山を歩いてみても竹藪は荒れたい放題で、林床はタケの葉で覆いつくされている。これ以上、天王山の荒廃は見たくない。何とか以前の天王山に戻したい」と語っていた。正確な数値として、竹林が

a）放棄された竹林

b）整備後の竹林

写真－1　天王山における藪状化した竹林と間伐された竹林（2005年）

毎年５ｍずつ拡大しているのかは定かでないが、何かしらの変化を感じ取り、ボランティア活動に携わっているといえる。この天王山の様相の変化について、他の地権者は「地下水取水条件が悪化している」[7]ことを指摘している。この要因として、名神高速道路の天王山トンネル開通との関係も挙げられるが、林床がタケの葉で覆われことも要因に挙げられるであろう。タケの葉が地面を覆うことにより、天水が地下に浸透しにくくなっていると考えられる。これらのことから、天王山の変化は様々な立場から様々な形態で経験的に察知されている。

また、竹林ボランティアの会員の居住地が広範囲にわたる要因として、定年後などに生じた余暇の過ごし方が多様化していることが挙げられる。余暇の選択に森林保全活動が選択されるようになった要因として、里山保全の緊急性を取り上げられることが多くなってきたことが挙げられる。具体的事例として、西宮市に居住する会員のＢ氏は、「退職後の余暇の増大は、保全活動へ参加するきっかけとしてある。」と述べている。これに加えて「自然環境の荒廃といった問題に危機感を抱いている」と語っていた。Ｂ氏は竹林ボランティア以外にも、宝塚市で活動している森林保全ボランティアにも参加しており、環境保全に対して意欲的に取り組んでいる。Ｂ氏の保全活動に参加する動機としては、定年後の余暇利用に加えて、環境問題が社会的に問題視されていることが影響しているといえる。

⑵　竹林ボランティアによる保全活動

竹林ボランティアの活動指針としては、「大山崎竹林ボランティア会則」によると、「竹林の保全を図り、もってふるさとの自然を愛護する機運を高めることを目的とする」[8]とされている。竹林ボランティアとして、竹林の整備については“皆伐”するのではなく“間伐”を目的としており、タケ自体を「悪」として捉えていない。間伐はタタミ１畳に対してタケ１本という状態を目標に行い、伐採するものは古いタケを中心に行い、新しいタケを残すようにしている（**写真－１**）。竹林ボランティアの会長（2005年当時）からの聞き取りによれば、最終的には、タケノコ生産がなされたていた当時の状態に管理していくことを目標にしていた。

2005年当時、保全活動を展開する竹林は計５か所であった（**図－３**）。活動場所Ｅについては、地権者から竹林ボランティアに整備を直接依頼してきたものである。それ以外は

大山崎町役場を通して依頼されたものである。活動の内容は時期によって異なる（**表－2**）。４、５月では、収穫したタケノコは作業に参加した全員で均等に分けられる。活動場所Ｄについては、竹林ボランティアにより自給的にタケノコ栽培を行えるようにする予定である。なお収穫されたタケノコは地権者にも分けられている。この時期に、タケノコが手に入ることから、竹林ボランティアの参加者がピークを迎える時期でもある。この時期は、竹林の整備において重要な時期である。山頂付近で作業することもあり、高齢で足腰が万全でなくなった参加者は標高100m以下の活動場所ＣやＤなどで作業する。４・５月頃に、タケは最も成長する。24時間でモウソウチクでは119cm、マダケでは121cm成長したという記録がある（柴田、2001）。しかし、十分生育しきれていないために、タケを管理するには最適な時期となっている。新しいタケは柔らかく、人間の背丈ぐらいのものならば足で容易に折ることができる。成竹と同じぐらいに成長したものは、林床にまで日光が届くように「先折」を行う。先折とは、タケの下部を揺すってタケの先端部分を折り、背丈をそれ以上伸ばさないようにすることである。この時にロープを使い、折る位置を決めることができる。折れたタケはそのまま落下してくるために、下でタケを揺する人はヘルメットを着用し、安全に行うようにしている。この時期にどのように整備次第で、その後の竹林の様相が決定され、整備の作業効率に影響を与えることになる。この時期の天王山はハイキング客も多い。活動場所Ａはハイキングコースに面しているところもあり、ハイキング客の目に触れることも多く、収穫したタケノコを分けたりすることもある。竹林ボランティアの活動を世間に認知してもらうためには、ハイキングコースに面していることは好条件となっている。

６月から９月までの活動は正規の活動ではなく、基本的に月一回の活動で毎月第２土曜日に行われる。作業内容については、５月末から６月はマダケのタケノコが出てくる時期で、マダケの間伐が中心となる。７、８月には、活動場所Ｄで草刈りが中心になる。以前、活動場所Ｄではタケが鬱蒼と生い茂っていた。その状態を町役場は「景観上好ましくない」ということから、竹林ボランティアに依頼し、タケを皆伐した。その後に、マツの幼木などを植林したが、放置しておくと雑草が生い茂る。雑草が優占種になると、マツの生育を阻害させるため、雑草の繁茂が最盛期を迎える夏の前に刈り取っている。またこの時期は、暑さのために山頂に登るのも労力を要し、平地もしくは標高の低いところで作業する要因となっている。９月に入ると、再びタケの間伐を中心とした作業になる。しかし、まだこの時期も気温が比較的高いので平地での作業が中心になり、2005年は活動場所ＣとＤ、Ｅで活動を実施した。活動場所Ｅの周囲は民家と集合住宅、道路に囲まれている。そのために作業時には注意を要する。切ったタケを倒す際に、道路などに倒せば通行人などの第三者にケガを負わせかねないからである。作業の安全性ついては、地権者がボランティア団体に対して整備を依頼することを躊躇させる要因の一つとなっているため、竹林ボランティアは、タケを切り倒す際に全て竹林の内側に倒れるよう安全性に細心の注意を払っている。ボランティア会員は、意図した方向にタケを倒す技術を身につけることによって、事故防止に努めている。１日の作業で、活動場所Ｅではタタミ１畳にタケが１本という理想とする状態になったが、翌年の新タケが出る時期に放置すれば、再び鬱蒼とした竹林に戻ってしまうため、継続的な整備が望まれている。10月からは再び正規の活動に戻り、月２回の活動を行う。この時期になると気温も下がり、山頂付近の活動場所ＡやＢでの整備が再開

される。タケの間伐を中心とした活動は3月頃まで行われる。10月から翌年3月までの期間には、竹林の整備に加えて町の文化祭などの地域行事に竹細工などを出品し、竹細工の製作を行ったりもしている。冬季には正月の門松の製作や地元の中学校の卒業記念植樹等も行い、町内で多様な活動を展開している。

4．竹林ボランティアの果たす役割

(1) 「地域社会」に果たす役割

先述のように、竹林ボランティアでは竹林の整備に加えて、多様な活動を展開している。2005年度の活動を通じてみると、7月下旬には大山崎町の青少年健全育成主催の「親子流しそうめん」を開催した。このイベントでは、竹とんぼや竹馬の製作といった、竹細工製作も同時に行った。7月21、23日には行事準備のために、臨時の活動が行われた。この時には、流しそうめん台や竹とんぼなど材料を準備した。このイベントは毎年行われており「地域行事」の一つとして定着しつつある。

次に秋季に行われた2つの取り組みが挙げられる。まず1つ目は京都市内でのイベントで、タケを材料にした「一輪挿し」を出品した。これは数10個単位で原価とほぼ同額で販売する。2004年度には50個を納入したが即時完売したために2005年度は増産した。2つ目は大山崎町主催の「産業祭」への参加である。同じく「一輪挿し」と「竹プランター」を出品した。こちらも、前年は即時完売したために2005年度は増産した。価格も原価とほぼ同じである。ボランティア団体が、竹細工を“販売”することには、いささか議論が生じている。「無償で活動するからボランティアなのだが、その産物を有償で販売するとは何ごとか。」といったものである。しかし、ボランティアといっても、竹細工を製作するには工具や金具などの経費がかかる。ボランティア団体がそれらを全て負担してしまうと、保全活動を継続していく上で支障をきたす。そのために、原価とほぼ同額で販売している。2004年度の京都市でのイベントでは、赤字になったという。「最低限の価格で販売しても良いのではないか」ということが竹林ボランティアの見解である。竹林ボランティアにとって重要なことは、団体の活動内容を広く認知してもらうことである。竹林ボランティアが地域行事に作品を出品することを通じて、「地域社会」に自らの活動を認知してもらう働きかけとなっている。これらに加えて冬季には正月用の「門松」の製作し、販売している。これも先の竹細工販売と同様の問題点がある。

さらに、3月には地元中学校の卒業記念行事へ参加している。この行事は中学校から竹林ボランティアに依頼され、記念植樹とタケを使用した記念物を製作している。2004年には、タケを材料にしたベンチを設置した。2005年度もタケ製のベンチを4台設置した。学校行事へ継続的に参画することは、竹林ボランティアの活動や、タケと里山保全の関係についての知識を大人数へ周知させることを可能にしている。

(2) 協議会に果たす役割

先述のように、2005年3月に協議会が発足し、年を追うごとに活動内容は多様なものとなり、活動実施回数や参加人数も増加していった。2005年度から2009年度の5か年で計31回の取り組みが実施された。取り組みのなかで、竹林の整備や竹細工などのタケに関連したものは12件であり、このうち10件は大山崎町でなされたものであった。

具体的事例として、2005年度11月に実施された「森林ボランティア体験行事」では、大手酒造メーカーの社員を中心として約70人が一般参加し、大手酒造メーカーの所有林にて竹林整備の体験を行った。このような体験行事に際して、最初に竹林を管理しなければならない理由が説明され、続いてタケ伐採方法などが、具体的な作業を伴う形態で指導された。この際、指導役にはかつてタケノコ生産をしていたA氏、指導補助を竹林ボランティアの会員や京都府職員らが務めた。竹林ボランティアからは約20人が参加し、人数を要する作業の伴う指導では、竹林ボランティアの会員が中心的な役割を担っていた。体験行事における指導を通して、竹林ボランティアの培ってきた竹林整備のノウハウは、協議会による取り組みを実施するうえで重要な役割を果たしていた。2006年以降も、行事名称は異なるものの大山崎町において竹林整備に関する取り組みは実施されており、竹林ボランティアの指導的役割の重要性は増してきているといえる。

また、親子参加型の行事や地元の小・中学生を対象とした教育的取り組みは、竹林ボランティアが以前から実施していたものである。さらに、この取り組みのなかでの竹細工については、竹林ボランティアが以前から行っていたものである。竹林ボランティアの行ってきた活動の実施主体が、協議会に転換したものとなっている。すなわち協議会による取り組みは竹林ボランティアの活動の延長上にあると位置づけられ、他の取り組みもその他の団体による何らかの活動の延長上にあると考えられる。協議会による大規模な森林保全活動に、タケを「悪」としない竹林ボランティアの保全活動が中心的なものになっていくことで、「里山の荒廃」と「竹林拡大」を二項対立的に付すことを軽減しているといえる。

5.「里山荒廃」と「竹林拡大」の関係性ーおわりにかえてー

1990年代後半以降、里山保全が注目されるようになり、全国各地で森林保全活動が多様な形態で取り組まれるようになった。全国的にタケノコや竹材生産が衰退し、放棄された竹林が拡大することにより広葉樹などの林相を改変させることは、里山を「荒廃」させる問題の一つに考えられるようになっていた。つまり、里山保全を推進するうえで、「里山の荒廃」と「竹林拡大」は二項対立的に位置づけられ、里山を保全するためにタケは排除すべき対象にされていることが多かった。しかし、元来、日本における竹林の多くは人間の生活空間に密接して分布してきた。竹林はほとんど単相林であるものの、人間によるタケノコや竹材の利用がなされることによって維持されてきた二次的植生であり、里山と似通った性格を有している。こうしたなかで、2005年より府境を越えて大規模な森林保全活動が取り組まれるようになった天王山を取り上げ、2005年以前より竹林整備に取り組んできたボランティア団体の活動を検討することから、「里山の荒廃」と「竹林拡大」がどのような関係性にあるのかを明らかにしようと試みてきた。

天王山において、竹林自体は大規模に拡大しているわけではなく、宅地化の進展などにより、むしろ面積は減少していた。一方で、タケノコ生産や竹材生産が衰退するなかで、竹林が産業的に利用されなくなっていた。竹林地権者は、所有を継続する者と水源林を必要とする大手酒造メーカーに売却する者に分かれたが、いずれの場合についても竹林を管理することはなくなった。その結果、竹林が藪状化することに危機感を抱いた大山崎町役場が指導するなかで、1997年に竹林整備を目的とした「大山崎竹林ボランティア」が設立された。竹林ボランティアは、元地権者を含む地元住民が中心となって竹林の整備にあた

るようにった。竹林ボランティアの活動は竹林の整備であったが、タケを皆伐するのではなく、間伐することにより、産業的に利用されていた時期の竹林に近づけることが目標とされていた。すなわち竹林ボランティアの活動は、竹林が「里山」としての天王山を「荒廃」させているのではなく、竹林の利用形態が変化することに対する対応策といえ、竹林の利用を継続することが目的となっていた。

また、天王山ではハイキングコースが整備され、地権者以外の外部者も竹林に容易に侵入することができる。そのため、藪状化した竹林は不法投棄や犯罪の温床となることが危惧され、さらに多くの外部者の目に触れることからもその整備が求められていた。このような状況下で、産業的利用に代替する形態でボランティア団体による竹林の整備が展開していた。しかし、天王山に分布する竹林のなかで竹林ボランティアの作業する面積は限定的であった。こうしたなかで、「天王山周辺森林整備推進協議会」が発足することにより、より広範囲の竹林整備に関わることとなった。協議会のような大きな組織では森林保全活動の全国的な潮流に影響を受け、画一的にタケが排除される危険性を有していた。しかし、対象地域において従来より「草の根活動」的に竹林の整備に取り組んでいた竹林ボランティアなどの団体が、協議会の実施する取り組みで中心的な役割を担っており、協議会による大きな取り組みに当該地域で培われてきた「竹林の整備」のあり方が取り入れられることとなっていた。そして様々なイベントを通じて、天王山における竹林がどのような状況におかれているのかという問題提起がなされていた。

以上のことから、天王山においては「天王山の荒廃」が問題意識となって、竹林ボランティアによって竹林が整備なされるようになり、全国的に森林保全への訴求性が高まるなかで、協議会による大規模な保全活動が展開するようになった。しかし、「天王山の荒廃」の要因が「竹林拡大」に収斂されることはなく、竹林ボランティアの活動を通じて、竹林はこれまでの産業的利用のなされていた竹林の状態を保つように整備されていた。さらに協議会による「松山再生プロジェクト」などの多様な問題に対処していくことを通じて、その他の樹種も含めて全体的に天王山の保全が図られるようになっていた。

本稿で明らかとなった成果は、対象地域における森林保全活動の実態を示したに過ぎない。また、「里山の荒廃」の語られ方についての言語資料の分析や、対象地域における保全活動の実態や社会・経済条件の検討についても限定的で予察的なものに留まり、今後の課題といえる。しかし、全国的に「里山の保全」が注目されるようになっているなかで、里山の有するノスタルジーな性格を喧伝し、問題の所在を「タケ」に収斂することによって、その背後に存在する地域的課題を捨象することには問題がある。このような状況に対して、本稿の成果は、ナショナルスケールで強調されている問題を相対化する役割を果たすと考えられる。今後、「里山の保全」を考えていくうえで、総論的に展開される打開策を画一的に施行するのではなく、地域的条件の変化から、里山の抱える課題を捉えていくことが必要といえよう。

謝辞：本稿は2006年３月に関西学院大学文学部に提出した卒業論文を大幅に加筆・修正したものである。本稿を執筆するにあたって、竹林ボランティアの方には活動への参加や貴重なお話を聞かせていただきました。大阪府北部農と緑の総合事務所の高峰氏には貴重な資料をいただきました。また田和正孝先生をはじめ、関西学

院大学文学部文化歴史学科地理学地域文化学専修の諸先生からは多くのご指導・ご助言をいただきました。末筆ながら以上を記して感謝申し上げます。

注

［1］「里山保全」をキーワードに新聞記事を検索すると、朝日新聞では1995年までに15件の記事がみられたが、1995～2000年に68件、2001～2005年に133件、2006～2010年に194件と増加している。読売新聞や毎日新聞でも同様の増加がみられ、学術誌上においても、里山に関する論文は1995年以降に急増している。

［2］『朝日新聞』2010年12月27日朝刊、千葉県版。

［3］大山崎町、長岡京市、向日市と京都市右京区、南区の一部を含む地域。

［4］「京都府統計書」より。

［5］「作物統計」より。

［6］「大山崎竹林ボランティア」ホームページ；http://homepage3.nifty.com/ohttb/index.htm（最終閲覧日；2011年1月4日）。

［7］協議会主催のシンポジウムで、地権者は地下水取水条件の悪化を盛んに訴えていた。

［8］「大山崎竹林ボランティア」ホームページ；http://homepage3.nifty.com/ohttb/index.htm（最終閲覧日；2011年1月4日）。

【参考文献】

1）四手井綱英：里山はどこを指すか、Green Power、308、pp.24－27、2004.

2）環境省編：平成18年度版　環境白書、ぎょうせい、pp.133－139、2006.

3）小泉武栄：里山（丘陵地）の自然保護、地理、46(6)、pp.41－62、2001.

4）渡邉敬逸：茅野市小泉山における林野の空間機能の変容、地域研究年報、27、pp.75－87、2005.

5）重松敏則：里山林の保全・管理に対する市民の参加意欲について、農村計画学会誌、9(1)、pp.6－22, 1990.

6）呉　尚浩：市民による里山保全の現代的意義－「市民コモンズ」としての都市里山－、中京大学社会科研究、20(1)、pp.75－121、2000.

7）倉本　宣：里山ボランティアが拓く世界、農業と経済、68(3)、pp.79－87、2002.

8）池中香絵：市民団体による里山周辺環境での活動実態と地域性－奈良県大和平野地域を事例として－、人文地理、60、pp.129－143、2008.

9）徳永陽子・荒木　光：竹林と環境、京都教育大学環境教育研究年報、15、pp.99－123、2007.

10）柴田昌三：モウソウチクと日本人、日本緑化工学会誌、28、pp.406－411、2003.

11）鳥居厚志：周辺二次林へ侵入拡大する存在としての竹林、日本緑化工学会誌、28、pp.412－416、2003.

12）鳥居厚志・井鷺裕司：京都府南部における竹林の分布拡大、日本生態学会誌、47、pp.31－41、1997.

13）鳥居厚志：空中写真を用いた竹林の分布拡大速度の推定－滋賀県八幡山および京都府男山における事例－、日本生態学会誌、48、pp.37－47、1998.

14) 鈴木重雄：竹林の分布拡大過程における土地利用被覆履歴の影響、地理学評論、83、pp.524－534、2010.
15) 淺野敏久：宍道湖・中海と霞ヶ浦－環境運動の地理学－、古今書院、2008.
16) 香川雄一：和歌山における公害反対運動の地域的展開、人文地理、55、pp.43－57、2003.
17) 淺野敏久：霞ヶ浦をめぐる住民運動に関する考察－都市化と環境保全運動－、地理学評論、63A、pp.237－254、1990.
18) 淺野敏久：環境保全運動の展開過程における地域性－中海・宍道湖の開拓・淡水化反対運動を事例として－、地理科学、52、pp.1－22、1997.
19) 柴田昌三：タケ、小方宗次・柴田昌三：現代日本生物誌 9 －ネコとタケ、岩波書店、pp.67－136、2001.

(2011. 1. 17 受付)

THE RELATION OF "*SATOYAMA* DEVASTATION" AND "BAMBOO FOREST EXPANSION" IN TENNOZAN.

Kunimitsu YOSHIDA

In promotion of the maintenance of "*SATOYAMA*", "*SATOYAMA* devastation" and "Bamboo forest expansion" tend to be understood inbinary opposition. However, it is assumed that it is difficult to find an immediate interrelation between these popular believes. In this paper, it was clarified what the relation of "SATOYAMA devastation" and "bamboo forest expansion". The case study area was Tennozan. As a result, "devastation of Tennozan" became the critical mind in the decisive point, and *Chikurin* volunteers accomplished maintenance of bamboo forest. However, it needed not to be converged a factor of "the devastation" by "bamboo forest expansion" and, bamboo forest was got ready to keep a state of made that of the past industrial use.